

# 学会ニュース

## 目次

・第28回大会について	.....	1
・学会成立前史など	水田 洋	.....
2		
・若手セミナー	.....	4
・事務局より	.....	5

## 第28回大会について

来年度の大会は、**2006年6月10日（土）、11日（日）**に、**広島大学（東広島キャンパス、学士会館二階会議場）**で開かれることが決定いたしました。開催校責任者は、青木孝夫会員です。詳細は5月半ばにお届けする予定の大会プログラムでご案内申し上げます。

**共通論題：広義のマナーとしての「儀礼・礼儀・作法」、総じて「礼」を巡るものとなる予定です（コーディネーターおよび司会は青木孝夫会員、原則として6月11日を当てる予定です）。**

18世紀学会のメンバーは西欧を対象とする研究者が主です。共通論題の中心概念として礼を取り上げるに際して、東アジアを軸に構想することにしました。礼は中国古代に発し、歴史と社会を貫く重要概念ですが、また東アジアに於いては礼の華夷秩序とでもいふべき中国を中心にした国際関係が存在します。そこには、18世紀の韓国ならびに日本に於ける中国の礼の受容（また変容）そして形成が問題となるでしょう（更には、朝鮮通信使という問題圏を介して、両国の礼儀・作法を巡る興味深い論点が浮かび上がる筈でもあります）。しかし、この東を軸とする構想はまた、西を見るのに東アジアという鏡を準備して映すためでもあります。礼の観点から東西文明や文明の全体を考える縁ともなればと思います。東アジアに於ける礼の力学や実態についての発表を踏まえた上で、それに対置・対比されるべきヨーロッパに於ける18世紀の礼儀・作法についての思想や実態がより明確に浮き彫りにされるのではないのでしょうか。

**自由論題公募**（原則として6月10日を当てる予定です）

第28回大会で発表を希望される方は、1000字以内の発表要旨（なるべくテキストファ

イル形式あるいは「ワード」ないし「一太郎」形式のフロッピーディスクとハードコピーの両方)を付けて、3月15日(水)までに学会事務局までお申し込みください(メールでも結構です)。発表者の待ち時間は1時間、うち報告が40分、質疑が20分を予定しておりますが、申込者が多数の場合には、待ち時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野間のバランスなどを勘案して、常任幹事会で調整ないし選考させていただきますので、その点、あらかじめご了承下さいようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっております。詳細はプログラムが決定次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

★ ★ ★

## 学会成立前史など

水田 洋

この学会には鷺見洋一代表幹事による『日本18世紀学会20年史』(1999年)があつて、成立前史をふくめてかなりくわしく知ることができる。前史が経済学史学会の国際18世紀学会への加盟であつたことも、かなり正確に書かれているのだが、いま「かなり」と抑制したことからおわかりのように、ひとつ重大なまちがいがあるのである。それは「経済学史学会」がたびたび(ぼくの文章のなかでさえ)「経済史学会」とミスプリントされていることで、「なぜ経済史学会が18世紀学会に」という疑問を当然に誘発(あるいは挑発)したのである。

経過をかたるまえに、この疑問にこたえておくと、文学のばあいには文学作品と文学理論がいっしょに文学史の対象になるのちがって、政治や経済の歴史とそれについての理論や思想の歴史とは、別のディシプリンなのである。もちろんこれについては批判がありうるし、理論史と思想史はちがうという意見もあるが、それはさしあたっての問題ではない。問題を経済学史という研究部門に限定して、そこで主要な対象が18世紀に属するといえれば、「なぜ」という疑問には、かんたんに答えることができる。経済学そのものが、18世紀の西ヨーロッパに成立したのである。イギリスではデフォウ、マンドヴィルからステュアート(サー・ジェイムズ)、アダム・スミスまで、フランスではケネー、テュルゴからシスモンディまでといえれば、おわかりいただけるとおもう。

経済学史学会の加盟過程については、20年史にも書かれているが、念のためくりかえしておく(とくに主として自分がしたことなので)。学術会議がまだ、登録科学者の選挙制であつたころ、ぼくは1968-74年に、経済学史学会推薦の会員で、第三部(経済学・商学)の幹事だつた。幹事の仕事のひとつに国際学会への派遣ということがあつて、毎年わずかながら各部に配分される予算で、国際学会への派遣を斡旋するのである。ところが実務にあたって気がついたことは第4-7部の自然科学部門ではすでにそれぞれの領域の国際学会があり、それに対応する日本の学会があつて、国内学会の会員が国際学会の年大会に派遣されているのに、人文・社会科学では、国際学会そのものが未発展であつただけでなく、国内学会の国際的対応もまったく不十分だということである。したがって、人文・社会系の学会では、予算が配分されて派遣されることになつても、対応学会と特別に交渉するわけもなく、ペーパーを提出することもない見物人であつた。派遣がきまつた

本人から、これはどういう学会ですかとたずねられたことがある。

これはまずいとおもったぼくは、いくつかの国際学会をみつけて、対応する国内学会に紹介した。中小企業と労働運動史の学会は成功した例であったと記憶している。ところが、自分が所属している経済学史学会については対応する国際学会が見つからないのである。国際経済学会という組織があっても、それは現代経済理論の学会であり、経済学史の居場所はなかった。大学の経済学部の基本講座が経済原論、経済学史、経済史、経済政策だというのは、帝国大学の先例にならったものだろうが、国際的には通用しない。今になってふりかえると、我々の居場所さがしが、国際的に経済思想史研究の潮流をよびおこしたのではないかとさえ思われる。

われわれはまずイギリスの経済史学会に接触した。当時の英語では経済史家も経済思想史も、エコノミック・ヒストリアンだったからである。しかしかれらはすでに国際歴史学会のメンバーであり、それと独立に経済思想史の国際学会をつくることには、関心がなかった。ちょうどそのころやはりイギリスではじまった経済思想史学会（HET）も、メンバーやテーマの国際化を歓迎し、開催時期もわれわれの希望どおりに、冬から夏に変更してくれたが、国際学会をつくる苦労をあえてしようとはしなかった。

こまっているところに、ジュネーヴのシオダー・ベスタマンから、コペ（スタール夫人の居城）で開催される第1回啓蒙思想国際会議のしらせがとどいた。ぼくはアダム・スミスの蔵書目録をつくる過程で、ヴォルテールの著作とされている匿名の『ジュネーヴ統治論』に出あって、ピエロ・スラッファに相談したところ、かれは言下にレデリチェのベスタマンにきけとこたえたのである。かれがイタリア読みの発音をしたことを、はっきり記憶しているのだが、ベスタマンはそこに私財を投じてヴォルテール研究所を設立して住んでいた。スラッファのすすめにしたがって、研究所をたずねたことが、ベスタマンとのつきあいのはじめだった。いまではかれを知っているのは、ヴォルテール研究者ぐらいかもしいれないが、新しいヴォルテール全集の総編集者、国際啓蒙思想学会の創立者とだけ書いて、あとは自伝（一橋大学社会科学古典資料センター、スタディ・シリーズ No 50）にゆずりたい。

ベスタマンのさそいを受けた経済学史学会は、一九六七年にコペで開催された国際18世紀学会の第一回大会には誰も送ることができなかったが、七一年のセントアンドルーズ大会には、平田清明を学会代表として（学術会議の学会派遣予算で）送ることができた。平田のベストセラー『市民社会と社会主義』は、そのときのヨーロッパ体験に触発されて書かれたもので、セントアンドルーズでの学会のスケッチもある。この本はマルクス主義者のヨーロッパ体験として、5万部も出るほど好評であったし、たしかに啓蒙思想の受けとり方の一例でもあった。一例という意味は、平田とぼくの共通の恩師であった高島善哉が、この本を「いなか者の東京見物」と評したことにもあらわれている。

このころから経済学史学会は、国際18世紀学会への団体加盟を考慮していた。セクレタリのサミュエル・テイラー（セントアンドルーズ大学のヴォルテール研究者）の好意にたすけられて、1971年、ナンシーでの第3回大会で、団体加盟がみとめられた（経済学史学会代表幹事は出口勇蔵）。この大会でぼくは「アダム・スミスとカラス事件」という報告をした。例によって原稿の作成がおくれてホテルでタイプを打っていたし、報告後も大会報告集に送るのをさぼったので、そのままの形では公表されていない。しかしこのテーマにはヴォルテールがからんでいるということもあって、フランス人の関心をひいたらしく、開会直前の記者会見で、ソルボンヌ大学のポモらしき人が、とくに言及してくれた。

ところが、これで一件落着とおもったのはまちがいで、大きな困難がまちかまえていた。

というのは、国際18世紀学会が、ひろく18世紀研究者に扉をひらきながら、一国一学会という組織原理をとれば、日本からは経済学史の研究者でなければ国際学会に加入できないことになり、文学や哲学の研究者はフランスやドイツの18世紀学会を経由しての参加しかなくなってしまうからである。国際学会がこの問題に気づいて一国一学会主義に規約を改正するのは、1979年、ピーサの大会でのことで、その準備段階で日本18世紀学会の創立の動きが進行する。創立大会は1979年7月14日に慶応大学で開催された。

ぼくはこのときの記念講演「二人のアダム：アダム・スミスとアダム・ファーガソン」を、ピーサでくりかえしたのだが、イタリアの若い研究者たちの熱気におどろかされた。報告原稿のコピーをとらせてくれと続出する希望に応じながら原稿の紛失を心配しなければならなかったし、ボルケナウが翻訳されたことを期待をこめて語る女性がいた。ぼくにあって、ピーサでの収穫は、ナンシーで目をつけていたフランコ・ヴェントゥーリに、来日を承諾してもらったことであった。

このあたりで成立前史はおわりにしていいのだが、「など」とつけたとおり、若干の断片を加えておく。

ナンシーとピーサのあいだで、エール大学での第4回大会があった。このとき、どういう風のふきまわしか、エディンバラのニコラス・フィリップスンと組んで「スコットランド啓蒙思想の定義」というのをやらされたのだが、一応の準備をしていってみると、フィリップスンは同じテーマで、どこかに書いてしまったらしく、議論はかみあわなかった。そういう中途半端な報告原稿でも、あとからコピーを請求されることがあって、失望がかさなる。

ピーサの大会は、カラベッリがいったように、「イタリア人がやったにしては」よく組織されていたが、このあたりから、学会の巨大化による会場の分散化という問題が出てきた。これはまず、分散した会場間の移動に時間がかかるということというのだが、テーマの分散による単位テーマあたりのオーディエンスの希薄化ということでもあるだろう。数百人の教室もあれば数人のところもあった。イタリア人でなくても、組織はたいへんである。

ぼくはナンシー以来、エール、ピーサ、ブリュッセル、ブダペスト、ブリストル、ミュンスター、ダブリンの大会に出席し、そのうちのいくつかで報告もした。日本18世紀学会ができたために、日本人参加者も増加した。橋わたしの役割は、なんとかはたせたのではないかとおもっている。中国からの参加について、日本からの資金的援助をもとめられたのは、ぼくが代表幹事をしていたときだったが、中国の報告者から会場で感謝されたのは、気持のいい思い出である。

最後にもうひとつ追加すれば、中国をふくむアジアでの18世紀研究である。18世紀が啓蒙の世紀、近代化の世紀であるのは、西ヨーロッパ（しかもその西部）だけのことであって、近代化としての18世紀の問題をどこでも18世紀にかぎるわけにはいかないのである。

## 2006年 国際18世紀学会主催若手セミナー

既に、学会ホームページでも簡単にお知らせしましたが、2006年の若手セミナーは9/11-15にかけて、カナダのケベック州のケベックとTrois-Rivieresの二カ所で開かれます。ケベックが9月11日から13日まで、Trois-Rivieres（モントリオールとケベックとのほぼ中間

地点に位置しています)が9月14日と15日ということになっています。このセミナーのコーディネーターは、Marc André Bernier (Université du Québec à Trois-Rivières) と Hans-Jürgen Lüsebrink (Universität Saarbrücken) の二人です。

今回のテーマは「啓蒙と歴史」です。「歴史」概念が啓蒙主義時代に不在だったという未だ根強い見解とは異なり、この時代において「歴史」を巡る問題系が実は極めて重要な位置を占めていたことを見据えた上でのセミナーとして企画されます。「啓蒙と歴史」というこの主要テーマは、以下の三つの軸からなっています。(1)「古代を再創出する」、(2)「(複数の)新世界を想像する」(これには更に「植民地化以前の非西欧社会の歴史的次元の(再)発見、評価つまり理念的把握」、「非西欧社会の歴史の新たな認識の百科全書的流布および広範な伝播」、「アメリカ革命の哲学的・政治的重要性」の三つの側面が極めて重要ともされます)、(3)「révolutions を思考する」(ここではまずrévolution という語の大きな変遷にも注意が促されており、興味深いものがあります)の三つです。セミナー発表は、以上の三つの軸のいずれかに関係することが求められています。書類の提出締め切りは来年3月15日必着です。その後、書類審査を経て最大15人が招待されますので、積極的にご応募ください。また、発表者の選別にあたっては、特に2000年以後に博士号を取得した者が優先されるとのことです。

尚、以下のwebsiteに詳しい情報がありますので、そちらを参照して下さい。

<http://www.desvalises.net/seminaire2006/>

★ ★ ★

## 事務局より

### お知らせ

学会事務の簡略化および経費節減のため、電子メールによる連絡を学会事務局では進めております。また国際18世紀学会事務局でも同じ方向にあります。とりわけ今後の国際大会に関する連絡は、郵送からメールへと比重を移すものと思われれます。つきましては、電子メールアドレスを普段お使いでありながらまだ学会事務局にご連絡いただいていない学会員の方々には、以上の事情をご理解いただいた上で、事務局に是非ともメールアドレスをお知らせ下さい。電子メールで学会事務局に連絡して頂くか、もしくは同封の住所変更届にメールアドレスを記入した上で、日本18世紀学会事務局までご返送下さい。なお、会員のメールアドレスは事務局で責任を持って管理し、国際18世紀学会事務局および日本18世紀学会事務局からの連絡以外には使用いたしません。また、事務局から会員に連絡いたします際にも、各会員のアドレスが現れない仕方でメールを送信いたします。この点をご了解の上、ぜひメールアドレスを学会事務局までご連絡くださいますよう、お願いいたします。

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

### 新入会員

王寺賢太	テーマ	18世紀ヨーロッパにおける歴史叙述と政治思想
大河内文恵	テーマ	18世紀のオペラおよび教会音楽
中島渉	テーマ	近世イギリスの文学と思想
西浦麻美子	テーマ	18世紀後半フランスにおけるアングロマニー
松田聡	テーマ	モーツァルトとウィーン宮廷劇場におけるオペラ公演
真部清孝	テーマ	フランス革命期の小説作品
米典子	テーマ	19世紀イングランドの大学拡張と教育行政

新幹事会メンバー：青木孝夫、安藤隆穂、安西信一（常任幹事・年報担当）、井田尚（常任幹事）、伊東貴之（常任幹事）、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事）、金沢美知子（常任幹事）、川島慶子、木村三郎（常任幹事）、小穴晶子（常任幹事）、高橋博巳、寺田元一（国際幹事）、長尾伸一、馬場朗（常任幹事）、堀田誠三、増田真、森村敏己（常任幹事）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第50号 2005年12月発行  
発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久  
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室  
e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp  
fax: 03-5841-8958  
<http://www.soc.nii.ac.jp/jsecs/>